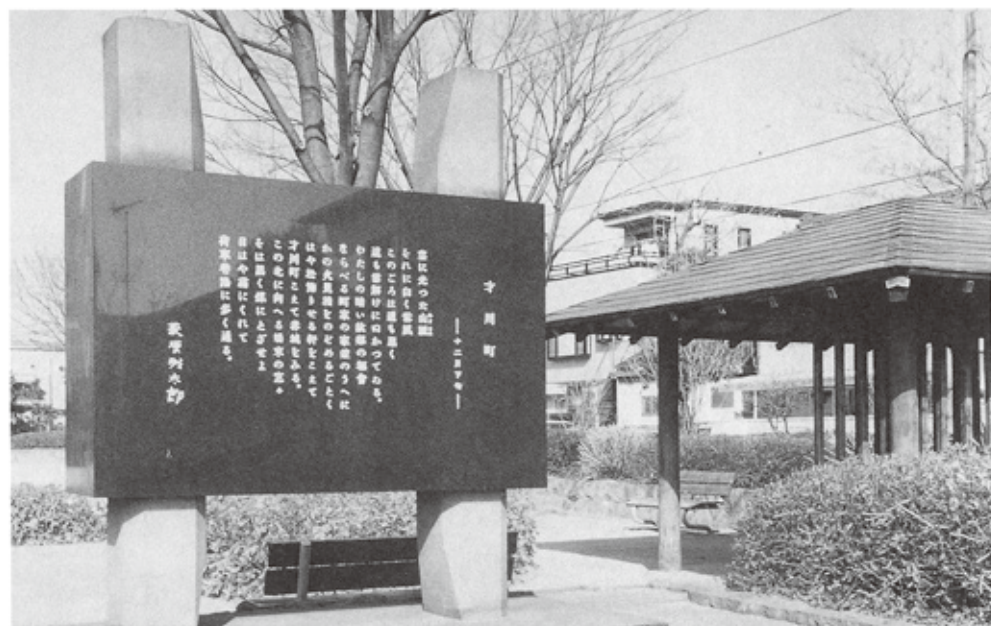


前橋文学館報

萩原朔太郎記念
水と緑と詩のまち

No.22 2002.11



朔太郎への関心

高橋 英夫

この原稿は、「付記」にあるように、平成14年5月12日(日)に行われた第30回朔太郎忌で、高橋氏が急病のため那珂太郎氏(詩人)／萩原朔太郎研究会会長が代読した原稿に本人が加筆したものです。

「朔太郎への関心」というやや漠然とした題を選んだのは、一貫したテーマを見つけ出すことが今回なかなか困難であったためです。私は、朔太郎は本当に独得な芸術家と思っていて、その独得なところや、おかしくもあれば、不思議でもあり、謎めいてもいるところについて何かお話できないかと考えて、結局こういうタイトルにいたしました。

やや余計なことかもしれませんが、萩原朔太郎という名前は前からいい名前だと感じていました。びったりしています。「朔」はついたちですが、他にこの字には「北」の意味もあります。朔太郎は明治十九年十一月一日生まれでしたのでこう命名されました。ほかに、歌人の会津八一も明治十四年八月一日生まれで、文字通り八一となりました。八一も私の好きな歌人なので、ついたち生まれは詩歌の女神に^{よみ}寄せられるめぐりあわせなのか、と思ったりします。私は月末の生まれ、もう一日遅れていれば一日生まれということで、ひよつとすると詩人になれたかも知れませんが、それはダメでした。

最初に申し上げた、朔太郎の不思議さは単純すぎる話のようでもあって、持ち出すのに気がひけますが、詩集の題のことで、第一詩集の題が大正六年の「月に吠える」で、第二詩集は大

正十二年の「青猫」でしたが、月にむかって吠えているのは詩集中の作品「悲しい月夜」などにもある通り、「犬」です。このタイトル「月に吠える」は病んだ犬に託して、朔太郎が自分の内部をあらわしていると思われまふ。ところが次は「青猫」で、犬から猫になった。そんなことは別に変ではないとも見えはするものの、私は一面では不思議な感じがしていました。朔太郎における「犬と猫」もしくは「犬」から「猫」へという問題は従来すでに語られ、了解ずみになっていられるのかもしれませんが、私はそのへんの事情にくわしくないのです。

さまざまの動物に、作者が自分の中にあるものを投入したり仮託したりするのは、文学でよく見られることですが、朔太郎の場合は、無造作というのか大胆というのか、この犬そして猫というのがずつと気になっていました。

ドイツの詩人リルケは一九〇二年から、パリで彫刻家ロダンの秘書のような仕事をしました。その後行きがちがあつて、リルケはロダンのもとを去りますが、その芸術には尊敬を抱きつづけます。そして一九〇七年にロダンの創作活動に学んで書いてきた「事物詩」をまとめ、「新詩集」を刊行、〇八年にはその別巻も出しています。パリの暮らしの中に見かける諸々の事物、歴史や神話の中の人物たちなど、「もの」の存在をきたい表現に

彫りつけたような詩集で、リルケの中期を代表していますが、その「もの」の中にいくつも動物が含まれています。たとえば

「豹」

「かもしか」

「紅鶴」

「犬」

「黒猫」

「白鳥」

というふうには。中でも「豹」は『新詩集』を代表する名作とされています。リルケ『新詩集』は時代的にも初期の朔太郎とそれほど違わないころの制作です。そういうリルケの例が思い浮かぶのですが、朔太郎の「月に吠える」と『青猫』には、凡常なものをこえた、途方もない詩的変幻力を感じたわけでした。

ただ二人ははっきりと異なる点もあります。リルケにも孤独や苦悩は入っていますが、それ以上に「存在の認識」を目ざしている。「もの」へのまなざしはそこから発している。「豹」「かもしか」「犬」「黒猫」……と次々表現されるのはその意味で当然なのです。他方、朔太郎は自分の内面(苦悩)を動物に投影している。リルケ的にあらゆる事物、さまざまな動物が通過、明滅するというのは性格が異なると思われ、その点私は不思議さを感じたわけでした。なお「月に吠える」の中にも「まつくろけの猫が二疋」で始まり、「おわあ、こんばんは」「おわあ、こここの家の主人は病気で」が出てくる「猫」という詩があるかと思えば、「青猫」の方にも「遺伝」という犬の詩があるということも思い合われ、こういうのが朔太郎の独自性の一端なのだ、

やや頭が攪乱せうらんされるような思いをしています。

次に私が感じてきた別の不思議さは、今度は詩ではなくて、彼の晩年の人生の相についてなのです。昭和十六年の秋に朔太郎は健康がおとろえ、体調が思わしくなかったようで、外出せず家に引きこもります。また来客を避けて人と面会しなくなっています。この引きこもりは長くつづき、翌十七年も同じ状態で、そのまま十七年五月十一日に死去してしまいました。おそらく最後の半年以上も引きこもっていたわけですから、原因はたしかに肉体的な不調が長びいていたためにちがいませんが、それだけだったのだろうか、と時々思っていました。

これは、何か精神的、思想的な問題を重たくかえるようになっていた、こういう半面もありはしなかったろうか、という想像です。別にそう想像する根拠があるというわけではありませんが、私があるような想像をしたのに



講演原稿を代読する那珂太郎氏

は二つほどわけがあります。

第一は、朔太郎は若い頃、「月に吠える」の時代に、一年もあいた作品を発表せず、おそらく人にもあまり会わず、内にとじこもっていたということがあるからです。これについては、那珂太郎先生が「萩原朔太郎その他」(小沢書店)に収められた「月に吠える」についての中でくわしくお書きになっていて、私はそれに啓発されたのですが、那珂さんによると、大正四年五、六月ごろからの朔太郎の「空白」は、白秋などまわりの人々を大いに心配させたものようです。しかし約一年の沈黙の後、朔太郎は詩作を復活させ、あわせて白秋宛手紙で自分の精神生活を書いていきます。

曰く、沈黙は有意義だった、私は自分を見つめ、醜悪な自己を憎み、どん底に陥ったがついに救われた、神を発見したからだ……

さらに別の手紙では、私は自分の罪は許されたという声を体感したが、その声の持主は「ドフトエフスキイ先生」であった、この先生が自分の神である……そう書いています。

朔太郎の若かりし時代に、宗教的なこういう内的体験が現にあったわけで、それは「ドフトエフスキイによる『愛の啓示』と名づけていいものだ」と那珂さんは仰言っています。

ただこの体験がそのまま当時の詩に表現されたとは言えない感じですが。それは詩人朔太郎の内部に水脈として秘められたというふうであったのでしょうか、朔太郎はこのように精神的思索、煩悶によって閉じこもり、沈黙するタイプの人間でありました。この点は重要ではないでしょうか。

第二に私が思い出すのは、俳人松尾芭蕉にもやはり晩年に引きこもりの期間があったということです。元禄六年、芭蕉五十年のときのことですが、その翌年の元禄七年秋に芭蕉は他界するので、すでに晩年に入っています。この六年の残暑のころ、約一ヶ月草庵の門を閉じて芭蕉は引きこもり、外出せず、人にも会いませんでした。大勢の門人を擁していたのが芭蕉ですから、その人生は「師」としてのおのれを弟子たちの前に曝して生きてきたと言いうるのですが、それが門戸をかたくとざしてしまった。これは何故だったのでしょうか。

「閉関の説」というあまり長くはない俳文を芭蕉は書いていますので、そこから当時の秘められた心境および事情をうかがい知ることができそうでもあります。しかし「閉関の説」は読んでみても、どうもはつきりしたことは見えてこない文章なのです。この俳文ははじめに、「色は君子のにくむところにして、仏も五戒の初めに置けりといへども、さすがに捨てがたき情のあやにくに、あはれなるかたがたも多かるべし」と言っている。つまり色恋の戒めをまず説きながら、しかし色恋には趣ゆたかな所も多い、と述べて、その次にはこう語っています。

「海人の子の波の枕に袖しをれて、家を売り身を失ふためしも多かれど、老いの身の行く末をむさぼり、米銭の中に魂を苦しめて、ものの情をわかまへざるには、はるかに増して罪ゆるしぬべく……」

この個所の大意は、「色恋に溺れて悲惨に陥る例もありはするが、老いていたずらに長命をむさぼり 物欲にとらわれるのよりは、はるかに罪は軽いのだ」ということです。さらに後の

方では、こう語ります。

「南華老仙(莊子)のただ利害を破却し、老若を忘れて閑いひらに
ならむこそ、老いの楽しみとは言ふべけれ。人來たれば
無用の弁あり。出でては他の家業をさまたぐるもうし。」

この個所は、莊子のように利害を超えて、老若も忘れて「清閑」にすすのが老いの楽しみなのであって、他人が来訪してくれば無用の用が生ずるし、外出してゆけば他人の仕事の妨げになる、これは心苦しいことだ、と述べています。

芭蕉は「閉閑」による超俗の境地を語っているわけですが、本当の所はどうだったのでしょうか。今日でも芭蕉の真意については専門家の間でも突きとめられていないようにみえます。何かがあつたらしい、とは思われていますが、芭蕉はそれ以前にも時々人嫌いになっていたので、このときも強い厭人癖が発したのだらうとする見方もあります。またそれとは別に、芭蕉の女性関係が背後に秘められていたのでは、とも見られています。冒頭で「色」は趣ゆたかなものである、と逆説的な説き方をしてる感じがつたわってくるので、私はこの見方が当たっているようにも思うのです。ともあれ本当の真実はいまだ明らかにならないままに、晩年の芭蕉の精神的苦悩は誰だれもが感じとりうるというべきではないでしょうか。

同時に、朔太郎の晩年の引きこもりも、芭蕉に照らし合わせ、大詩人の老いの間に忍びよってきた何らかの精神的・肉面的な苦しみと模索のためではなかったか、と思いきやらすこともできるでしょう。芭蕉もそうですが、朔太郎のような代表的な一流の詩人については、人生と作品にいろいろと不可解さが

あるものです。それを解こう、解説しようとすることは必要ですが、時には無理に解こうとはせずに出来るだけ多くの謎と不思議を方々から見出して、その不思議な重さを感じとりながら、いつまでもその不思議さを読者は自分のものとして持ち続ける、こういう姿勢もいのではないのでしょうか。私は朔太郎研究者ではないので、何かを解こうというよりは、何でもいから感じとつてみたいと念じています。ただし芭蕉晩年の「閉閑」には女性のかげが漂っているらしいのにくらべて、朔太郎晩年の引きこもりには、女性問題はなかったと思います。結婚生活にかげりがあつたとはいえ、それと晩年の引きこもりとは別で、私は引きこもりの隠れた内面性を遠く思い浮かべてみたい気持ちです。

ここまで、朔太郎という詩人には不思議なところ、変わったところが種々あるということをやってきましたが、ここで少し方向を転換いたします。今度申し上げようとしているのは、朔太郎だけでなく朔太郎をも含んだ明治の人々——主として文学者たち——のあいだに形づくられた人間関係はどんなものだったか、ということなのです。人間関係にもさまざま、親子、男女……とありますが、今は友人関係と師弟関係を中心にしてみてゆきたいと思います。

実はこの場所で、朔太郎について話をせよと、那珂太郎先生からご依頼があつたとき、先生のお話では、あなたは「友情の文学誌」という岩波新書を昨年出しているが、その中で朔太郎と室生犀星の友人関係のことを少し書いて、それを題材に

してはどうかということでした。成程と思いましたが、そのときはあまり気乗りがしませんでした。というのは、私のその本は鷗外、漱石、芥川、白樺派、小林秀雄を主として扱ったもので、詩人については考察と記述がまだ不充分と感じていたからです。しかし不充分だから少しずつ同じテーマを何度も取上げて深めようとするのもいいという気になってきました。そこでここからは朔太郎を中心にしてというよりは、朔太郎を含んだ明治の文学者たちの師弟関係、友人関係を時代的観点に立つて展望してゆきます。友情よりも師弟の方を前に出して考えてみます。

朔太郎は明治十九年生まれ、明治の第二世代と言えるでしょう。どこからどこまでが第二世代かといったことは厳密には決められません、それを承知の上で第一世代と第二世代をくらべてみましょう。

第一世代の分かりやすい代表は鷗外、漱石です。明治になる少し前に出生した世代です。五人ほど列挙してみると

森鷗外 文久二年(一八六二)

夏目漱石 慶応三年(一八六七)

内村鑑三 文久元年(一八六一)

二葉亭四迷 元治元年(一八六四)

幸田露伴 慶応三年(一八六七)

ところでこれら第一世代の大きな特徴は、はっきりした形では師匠、先生がいなかったということでした。いないと言っただけでは言い過ぎなら、初歩的な子供のころとか、英語、独語、心理学、医学……と個別の分野では就いて学んだ先生たちはいない

けれども、人生全体を導き、方向指示を与えてくれる本質的な師というものが不在である世代でした。これは何故かという点を少し考え直してみよう。

漱石、鷗外よりかなり前の世代ですが、福沢諭吉(天保五年、一八三五年生まれ)に、「一身にして二生を経るが如く一人にして両身あるが如し」という言葉のあることが知られていきます。新しい西洋文明を学ぶことになった当時の人物として、江戸の文物学問と、明治以後のそれとは違っていた。第一世代の人々は古い昔の先生から学んだものをただ身につければよいというだけでなく、それ以上に自分の力で自立して新しい学問知識を身につけていった。彼らは「二生」、二つの人生を生きなければなりません。これが第一世代に本質的な師が見出せない根本の原因でしょう。

森鷗外の「妄想」という小説の中に、作者自身と見なしうる主人公がさまざまな本を読み、思索をしたことを述べたあとで、こう言っています。

自分は辻に立つてみて、度々帽を脱いだ。昔の人にも今の人にも、敬意を表すべき人が大勢あつたのである。

帽は脱いだ、辻を離れてどの人かの跡に附いて行かうとは思はなかつた。多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつたのである。

ここでは「辻」、つまり町角に立っていて尊敬すべき人に会う

と、自分は帽子をとっておじぎをした、と言っています。「辻」は学問世界の「辻」だと考えられます。そして何よりも重要なのは「多くの師には逢つたが、一人の主には逢はなかつた」と言っている個所でしょう。つまり個々の専門分野での「師」には出会つたけれども、たった一人、これこそ自分があとについて行かねばならぬと信じられるような「主」には会えなかつたということです。「二人の主」は「唯一の師」ということだろうと思いますが、ここに鵬外の第一世代としての基本的特性がまざまざと読みとれるわけです。

漱石についても人生の偉大な師といった存在は見当たりません。エピソード的にお話ししますが、漱石全集の小品集に「ケール先生」「クレイグ先生」「博士問題とマードック先生と余」というのがあり、どれも心のこもつたいい作品ですが、漱石は日本人の先生たちのことは語らなかつたのに、これら外国人の尊敬すべき人物についてはいい作品を書き残したわけです。

では、次の第二世代の特徴はどこにあったのかというと、これは漱石の弟子たちを例にすれば分かり易い。漱石には生徒、お弟子、ファンが多勢いました。主な人々を列挙してみましよう。

寺田寅彦	明治一一年(一八七八)
森田草平	一四年(一八八一)
鈴木三重吉	一五年(一八八二)
安倍能成	一六年(一八八三)
小宮豊隆	一七年(一八八四)
内田百閒	二二年(一八八九)

久米正雄 明治二四年(一八九一)

芥川龍之介 二五年(一八九二)

彼らは互いの間にあつた友人関係を築きましたが、それ以上に尊敬する先生のもとに集つてゐることを誇りに思つていました。つまり第二世代は先生をもつた世代なのです。いや、タテ軸としての師弟とヨコ軸としての友をしっかりと人生構造として組み立てた人々でした。

さらに第二世代の中の他のグループも見えてゆきますと「白樺派」と「鵬外派」の存在があります。

白樺派 志賀直哉 明治一六年(一八八三)

武者小路実篤 一八年(一八八五)

彼らは漱石の直接の門下ではありませんが、漱石を「先生」と見ていました。志賀の場合は他に内村鑑三も「先生」であり、ドイツ語の家庭教師してもらつた「偉大なる暗闇」こと岩元禎も「先生」でした。

一方、鵬外を師と思ひ、崇拜していた人々の存在も顕著なものがあります。

永井荷風 明治二二年(一八七九)

斎藤茂吉 一五年(一八八二)

木下全太郎 一八年(一八八五)

すべてではありませんが、彼らの多くは近代日本の中樞的人材を養成する目的をもつていた(旧制)高校と大学で学んだ人々でした。彼らが将来、政治家、外交官、官吏、学者、実業家となるためには、いわば人間関係のタテ軸とヨコ軸がしっかりと組み合わされている必要があります。勿論もちろんそういう中からも、

そうした関係にとらわれない、それから離脱してゆく人材は、これも少なからず輩出しています。

この人々と比べると、同じ世代であっても白秋、朔太郎、屋星たち詩人の生き方、様子はすこし異なっています。詩人は大体の友情に厚い人々であり、白秋、朔太郎たちもその通りで、彼らの友人関係についていえば、私は前にお話しした漱石門下などの人々と特に違った所は認められません。どこか違っていたのは師弟の方で、これら詩人たちは師をもつ第二世代でありながら、それぞれはつきりと師と呼ぶような人物が見当たらなかった。いるにはいても漱石門下生、鷗外崇拜者とは姿勢が違っていました。朔太郎が師といっているのは北原白秋ですが、白秋が一つ年上なだけです。早熟で華やかな白秋は早くから詩人として名を成したのに対し、一方朔太郎は詩人としての出発が遅れたので、白秋を師と感じたときがあったのも自然でしょう。

こうして二人の仲は師弟にして友人であるといったようなもので、前にいったタテ軸ヨコ軸のあの構成的な形は見られませんが、屋星と朔太郎についても、これは屋星が明治二十二年生まれで、朔太郎より三つ若い。けれども屋星も早くから新進の抒情詩人と評価されていたので、朔太郎よりも先んじています。

二人は友人ですが、朔太郎は若い屋星の方を先輩と思っていた時期があったでしょう。要するに私が言いたいのは、明治の能力とチャンスに恵まれた若者が世に処してゆくにあたって、師弟、友人の中に入って学ぶという学校制度が出来ていた。それによりうまく適合できないタイプ的人物もいた。そういう人間は「公」、オフィシャルな分野ではなく、「私」、プライベートな分

野に自分の人生を求めて行きます。詩人、文芸学者もタイプはいろいろですが、多くは「公」のコースからはずれた存在として、ポエツトすなわち詩人として生きる、またプライベート・マン「私人」として生きる、在野の人間・無用者、漂泊者として生きるということになりました。朔太郎はこうして明治青年の平均的人生コースとか学歴の面からしても、純粋に詩人であり、純粋に私人でもある独自の人物だったと思います。

さてここで、明治の第二世代が友人、師弟関係に豊かなものを発散していたところから、では特異な第二世代の一人としての朔太郎の、友人・師弟関係の現場の一つである「学校」のかかわりをもう少し跡付けてみたいと思います。朔太郎の年譜から、彼の学校とのかかわりを示す項目だけを抜き出しますと



明治三九年 前橋中学校卒業

〃 四〇年 (旧制)五高(一部乙)に入学(一部乙とは英語

中心のクラスのこと)

〃 四一年 五高落第

〃 六高(一部丙)入学(一部丙とはドイツ語中心

のクラスのこと)

〃 四二年 六高落第

〃 四三年 六高退学

〃 四四年 慶応義塾入学、退学

ここから誰にもすぐ分かるのは、朔太郎がタイプとして学校不適応であったということでしょう。なぜか才能はあっても、向学の志を抱いていても、またいい友人を持つことはできても、学校生活にうまく自分の人生のリズムを合せられず、苦しみ、挫折(さげす)してしまうという青年がいるものです。第一世代でいうと鷗外、漱石は学校適応型でしたが、これに対して露伴は典型的に不適応型でした。露伴はさしたる学歴をもたず、もっぱら図書館で万巻の書を読破したという人です。朔太郎の場合は露伴とも異なっていました。高校の友人と談論風発するということはあったようですが、私の想像するところでは、旧制高校での挫折者のかかりのパーセンテージが語学について行けなかったという事実があったことから推して、朔太郎も英語かドイツ語が分かりませんが、語学の授業で苦しみ、試験で合格点がうまくとれなかったのではないだろうか、こう考えられないでしょうか。

これは朔太郎に対して少し失礼な想像かもしれませんが、一

つの可能性はそこに認めうるように思います。というのは朔太郎の「言葉」というか「言語表現」というか、実に風変わりで独得なものがあつたからで、あの独得で標準的・定型的な言葉の使い方にとりしても適合できない人間だった朔太郎は、旧制高校の外国語で苦しんだ可能性は相当に大きい。いや語学力、表現力は充分にあつたとしても、その独得な語法、言葉づかいは、当時の型にはまった語学の先生たちのお手本のな訳文とひどくかけはなれていた。そのために彼の答えは語学教師たちからいい点を貰(もら)うことができなかった……こんなケースを私は考えているのです。そしてこれは、逆説的に朔太郎の言葉の天分、表現のケタ外れの天才性を傍証することにはならないでしょうか。

朔太郎と年齢も近く、お互いの交わりのあつた作家谷崎潤一郎、芥川龍之介は、学校適応型でしたし、作家生活の間によくつか英語から文学作品の翻訳をしています。それは、語学者や翻訳家の翻訳ではない、作家の翻訳です。そこから出てくる空想として、朔太郎に「新しき欲情」「虚妄の正義」などアフォリズム集がいくつもあるのを思い合わせ、私は、もし彼が英訳からの重訳であつてもいい、ニーチェの作品のようなものを、分量は少なくとも翻訳してどこかに発表していてくれたら、詩人朔太郎の言語の特質を掘り下げるのにずいぶん役立っただろう、と時々思っています。つまり、詩人の翻訳というものを空想するわけで、語学者ふうにコチコチの、正確第一の訳ではない、いかにも奇矯(きこう)ではあるが、他の誰にも思いつかないような発想や表現のあやにわれわれは触れることができたのではないか、というふうに思いめぐらした次第です。

以上お話ししたことは、朔太郎と学校生活の謎めいた関係という話題でしたが、すでにお気付きのように、話はおのずと朔太郎の言葉、言語表現とは何だったのかという問題意識の方に入ってきています。さて、これからが今回私が申し上げようと思つたことの結びの部分となります。

私は以前から、「詩とは、詩人とはその本性において、揺らぎ、ずれ、変形がたいそう多いものである」という考えをもつていました。この命題めいたものは、朔太郎についても、特に彼の言語についてよくあてはまるといってお話しを少ししてみます。

詩人の揺れ、ずれ、変形とはどういうことか。例をあげましょう。中原中也はよく自分の詩を原稿用紙に手書きしたものを持っていて、この人には自分の詩を読ませたいというときにはそれをプレゼントしていたと言われます。中也と縁の深かった大岡昇平氏がそう書いていました。こういう場合、手書きでするので、すでに活字化されている原作と所々ちよつと違つていたりしたそうです。原因は二つ想像できますが、一つは単純な写し間違いです。もう一つは書き写しているうちに作者自身こはこう直したいという気持が生じ、手直しをしてしまうのです。こういうわけで、世間に、あるいは友人たちの間に流布した中也の詩には形の違い、崩れ、直しがあるものがある。ヴァリエーション、ヴァリアントという英語がありますが、ヴァリアント版がいくつか方々に渡つたのです。ただそれで今日の中

也全集の校訂がひどく大変になつたのかどうか、そこは私は存じません。

また歌人であると共に、民俗学的国文学の「折口学」で知られた折口信夫の場合を取り上げてみましょう。折口信夫は異能の天才でしたが、主として古典の和歌などをきわめて多く頭に叩きこんでいた人で、話や講義の中にそれらのうたが口をついてすらすらと出てきたということです。折口信夫は国学院大学、慶応大学で教えていましたが、講義の中に引用する和歌など、あとで学生が調べると、書物に出ている形とやや違つていることがあつたとか。記憶力が絶大にすぐれた人はかえつてこういうことが生じ易い。原本を脇わきにおいてそれを見て読み上げるようにすれば、こうしたずれ、変形は生じません。

私は、詩歌というものは本質的に形のずれ、変化、変形の生じ易いジャンルであると考えています。どうしてでしょうか。詩歌は概して短いので暗記、記憶に適している、また内容からも調子にのつて人から人へと伝わり易い、伝わってゆくのに向いている。そこでさまざまな場所で詩歌のずれと変形があらわれる結果となるのでしょう。

詩人によつて堅いはがねにのみを当ててきびしく言葉を彫りつけるように書くことをします。古くは、仏像を彫る仏師が像を彫るのに一回刀を当てると三回礼拝する、そしてまたそれをくりかえす、そういう厳格な作法にのつとつて仏像を作るといふことがありました。それを一刀三礼とか一刀三拝と言いました。詩人にも一刀三礼の作法で書いている人もいますが、全体としてみわたせば、そもそもポエジーは流動し流通するもので、

変形、ヴァリアントと不可避的に結びついているジャンルである、こう私はみているわけなのです。

そこで朔太郎の作品には、そのことはどんな風に見出されるのでしょうか。それとも見出されないのでしょうか。私は朔太郎にもそれは独自なかたちで存在していたと見ています。

朔太郎は不思議な、人の使わない表現——特に漢語的表現——をよく用いました。たとえば「氷島」の「漂泊者の歌」を取り上げますと、

ああ汝 漂泊者！

過去より来りて未来を過ぎ

久遠の郷愁を追ひ行くもの。

いかなれば踰爾として

時計の如くに憂ひ歩むぞ。

この一節の「踰爾として」が普通には言わない、変わった形です。普通にはこれは「踰爾として」となる表現でしょう。「よろよろとよろめきながら」という意味ですが、朔太郎でも別の詩「珈琲店 酔月」の中には、「踰爾として酔月の扉を開けば」という一行も見出されます。

また「国定忠治の墓」には

悽^{せじ}而^じたる竹藪の影

人生の貧しき惨苦を感じるなり。

とありますが、この「悽而たる」も辞書に出ている普通の形としては「悽絶なる」か「悽惨なる」でしょう。

また別の詩「我れの持たざるものは一切なり」には、次のような箇所が見られます。

いかに乞食の如く羞爾として

道路に落ちたるを乞ふべけんや。

これについても、「羞爾として」は常識的には「羞恥して」か「羞澀して」となるところでしょう。ですからこれらの表現は、国語辞典、漢和辞典に出ていない朔太郎語です。朔太郎はこうした辞書的に正しくない、やはずれた言葉、または近似的に変形した用語を時々使用していました。（これは彼の学校生活で、試験の点をとるのに不利となった可能性があっただろうという話とも結びつくわけです。）

辞典などには見出されなからうとも、詩語としてはそうした独自の言葉が作品のなかに確として存在している。このことを重く認めなければなりません。そうした表現は、これまでにも三好達治をはじめとして、多くの読み手たちに、あれこそいかにも朔太郎らしい、朔太郎以外の何ものでもない言葉だと受け取られてきました。このように、「踰爾として」などの幾つかの表現は、一方ではおかしな言葉だという印象を与えながら、他方ではそれとは別の意味のかがやきを発しはじめています。私はたとえば、実際には朔太郎の作品に存在しない形として

いかなれば踏踏として
時計の如くに憂ひ歩むぞ

悽絶たる竹藪の影

いかんぞ乞食の如く羞恥して

と言う文法的な形からの朔太郎的、純粹個人的なずれ、崩れ、変形あるいは直しとして、私は、あの「踏踏として」「悽而たる竹藪」「乞食の如く羞恥として」が出てきた、と思っっています。この詩人は原型的、辞書的表現を消去してしまいました。それを飛びこえてしまいました。そうして自分のオリジナルである変形、ヴァリアントの方に一挙に飛翔したのです。こういうことをやった詩人は他にいないのかもしれないかもしれませんが。そこに私は朔太郎の不思議な詩的、詩人的存在感を見る思いをして居ります。

(付記)

朔太郎忌の当日、病気のため前橋にうかがえなくなり、急遽書いたこの原稿を那珂太郎先生にお届けしました。当日は先生がこれをお読み下さいました。先生の御恩情に感謝申し上げますと共に、御迷惑をおかけしましたことをお詫びいたします。この文章は当日の原稿に加筆したものです。

〈プロフィール〉

高橋英夫(たかはしひでお)

一九三〇(昭和5)年四月三〇日、

東京生まれ。

文芸評論家。東大独文学科卒。

独文学会会員。

ホイジンガ「ホモ・ルーデンス」(昭38)の翻訳などのち、

『折口学の発想序説』(『中央公論』昭43・3)で評壇に登場。第

一評論集『批評の精神』(昭45)で亀井勝一郎賞、「役割としての

神」(昭50)で芸術選奨、「志賀直哉―近代と神話」(昭56)で読売

文学賞、「偉大なる暗闇」(昭59)で平林たい子賞を受賞。

他に、「疾走するモーツァルト」(昭62)、「ブルーノ・タウト」

(平3)、「西行」(平5)、「花から花へ引用の神話引用の現在」

(平9)、「ドイツを読む愉しみ」(平10)等の著書がある。シュ

タイガー、ケレーニイ等の翻訳でも知られる。

